

テツジンノウタ



大堀 研（東京大学社会科学研究所 助教）

Profile おおほり・けん

1970年生まれ。東京大学社会科学研究所助教。専攻は地域社会学。主に環境分野のボランティア・NPOの研究に従事。主な論文に「グリーン・ツーリズムが育てるもの」玄田有史・中村尚文編『希望学2 希望の再生』など。

今月は、『釜石市民の住民意識に関する調査』（市民意識調査、詳細は09年10月号）の結果も少しだけご紹介しながら、釜石市の住民活動について考えてみたい。

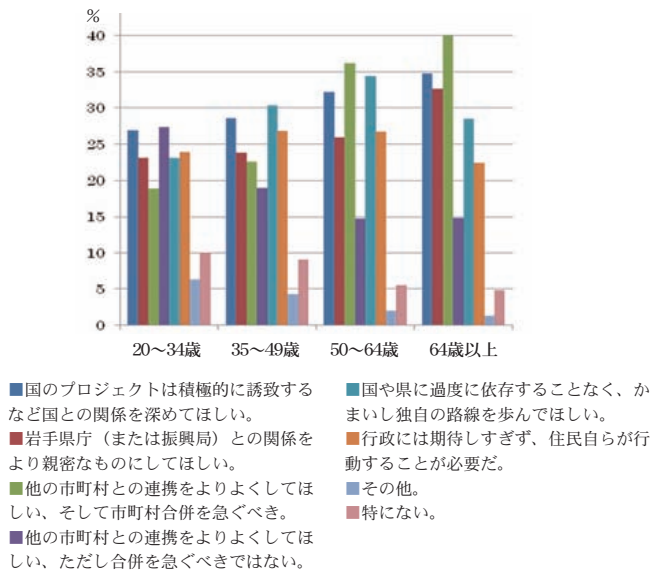
僕が釜石に初めてお邪魔したのは06年7月。その年の4月頃から釜石についての勉強を始めた。もともと僕はNPOやボランティアなどの住民活動をテーマに研究しているから、釜石でもそれを調査の中心の一つに、と考えていた。そこで、釜石市だけでなく、岩手県全体の住民活動について情報を集め始めた。ところが集めてみると、釜石についての情報もあるにはあるのだけれど、釜石以外の地域についての情報が情報が多いことに気が付いた。だから、釜石では住民活動が「非常に活発」とは言えないのかな、という印象をもった。

釜石にお邪魔するようになって、いろいろな方にインタビューをしていたときも、「（昔は）釜石は何でもあったし金もあったから（住民は）考えなくてもよかった町ですよ」とか、『住民』ばかりで『市民』がない」（ここでの「市民」という言葉は、地域のために自発的に考え行動する人のことを意味している）というお話をきいたことがあった。釜石は企業城下町だったから、釜石市民には（ちよっときつい言葉だけど）「依存体質」があるのではないかと、いろいろ指摘である。もしそれが正しければ、ボランティアやNPOなど住民による活動が盛んにならないのも当然かもしれない。

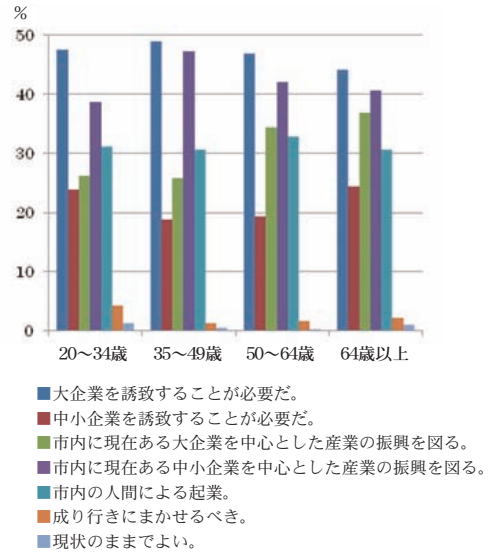
ところが、釜石で調査を進めるうちに、なんとなく考えが変わってきた。僕がお話をうかがってきた団体は、「すぐ自立」というわけではないのだけれど、大事な活動を、しっかりと続けているところが多い。たとえば、「小さな風」という団体がある。この団体は若者を中心としたグループで、「あつまれ！えがお」という子ども向けのイベントや「バトルトーク」という大人同士の話し合いの集まりを開催したりしている。08年1月にはメンバーが中心となって「お産フォーラム in 釜石」という地域の産科医療を考えるシンポジウムを開催した。僕も見学したが、ディスカッションがとて充実していて、素晴らしい内容だった。こうしていくつかの団体の活動をみているうちに、「依存体質」と言ってしまうのは違うんじゃないかな、と考えるようになってきたのだ。

そこで市民意識調査である。この調査では、「産業を発展させるためにはどのような努力が必要だと思いますか？」という質問と、「今後の釜石市の行政に期待することがありますか」という質問をさせていただいた。前のほうは、「大企業の誘致」がいいか、それとも「釜石市内の人間の起業」が必要か、など複数の選択肢から二つ選んでいただいた。後のほうは、「国との関係を深めてほしい」とか「行政には期待しすぎず、住民自らが行動することが必要だ」など、やはり複数の選択肢から二つ選んでいただいている。もちろん、それ

グラフ2 …「今後の釜石市の行政に期待することがあります」に対する答え（二つまで）



グラフ1 …「産業を発展させるためにはどのような努力が必要だと思いますか？」に対する答え（二つまで）



それぞれの質問文の文字通りの内容について、市民の皆様のご意向をお聞きしたのだけれど、別の使い方もできる。つまり、「大企業」や「国」を選ぶ方が多ければ「依存体質」がある、また「市内の人間の起業」や「住民自らが行動」を選ぶ人が多ければそうではない、という解釈ができる、と考えたのである。

「産業を発展させる…」の質問の結果をみてみよう。グラフ1では、世代別に分けて表示してある。どの世代も、1番多いのは「大企業を誘致することが必要だ」である。これだけをみると、「依存体質」がある、という判断になってしまいそうだ。だが、どの世代も2番目に多いのは「市内に現在ある中小企業を中心とした産業の振興を図る」である。特に35～49歳では1位に迫っている。ただ大企業に依存するだけでなく、市内にあるものを自分たちの努力で盛り上げていこう、という思いも垣間見ることができているのではないか。

次に「今後の釜石市の行政に期待すること」であるが（グラフ2）、こちらは世代によって多少ばらつきがある。まず、「国のプロジェクトは積極的に誘致するなど国との関係を深めてほしい」は、多くの世代で2番（50～64歳は3番）と順位が高い。この点では、やはり「依存体質」がうかがえないこともない。だが35～49歳では、1番は「国や県に過度に依存することなく、釜石市独自の路線を歩んでほしい」で、50～64歳でもこれが2番目である。20～34歳でも、最も多いのは「他の市町

村との連携をよくしつつ」合併は急ぐべきではない」で、やはり自主的な路線を支持する考えがある、といえる。

調査結果からは、どの世代にも、依存したいという心理と、自力で歩もうという気持ちの両方がある、というあいまいな答え方をするしかない。それから注意しなくてはいけないのは、この調査は他の地域と比較していないことだ。比較しないと、「依存体質」が高いとか低いとかいうことは本当は言えない。もつと調査と分析を続けなくてはならない。

ただどやっぱり僕は、「依存体質」という言葉を使うのはまずいかもなあ、と今は思う。もうひとつ例を出そう。釜石市の皆さんなら、毎年9月に「釜石はまゆりトライアスロン国際大会」が開催されているのがご存じだろう。09年には20回目の記念大会が開催された。この大会は、ほとんど一般市民の方々による手作りの大会である。若者から高齢の方まで多くの人々がボランティアとして参加して、大会を支えているのだ。まだ会場に行ったことがない方は、今度ぜひ応援に行ってみてください。大会に関わっている選手、スタッフ、ボランティアなど多くの方々のパワーを間違いなく実感できる。あれほどの大会を開くことができる釜石の人々には、「依存体質」という言葉はあまりふさわしくない気がする。表面的にはいろいろあっても、奥底には「鉄人スピリット」が流れている。釜石ってそんな場所なんじゃないだろうか。